第４回主会場選定専門委員会　会議要録

１　日時

平成 26 年(2014 年) 3 月 25 日（火）　13:30～16:00

２　場所

滋賀県大津合同庁舎　７－Ａ会議室

３　出席委員（五十音順、敬称略）

大西 美和（副委員長）、北沢 繁和、西條 智晴、坂 一郎、辻井 弘子、中井 敏勝、平林 光彦、松田 保、山﨑 薫、横山 勝彦（委員長）、吉田 政幸

（欠席委員：宇田川 真之、清川 佳子、小浦 久子、原 陽一）

（事務局：木村事務局長、事務局職員）

４　配布資料

別添のとおり

５　会議概要

会議冒頭、委員長より、本日の審議事項については、前回委員会の際に非公開とすることで決定していることを説明。

《審議事項》

（１）各候補地の評価について

別添「比較評価調書」および「評価票」に基づき各委員が総合評価を行ったうえで、それぞれの評価を基に議論を行い、各候補地の評価について、次のとおり「利点」と「課題」として整理がなされた。

なお、枠内は各項目に関連する委員の主な意見。

◆彦根総合運動場

【利点】

- 現在の県立総合運動施設としての位置づけの延長線上に機能強化を図れる。

・ 滋賀県の総合体育施設は引き続き県南部と東北部にそれぞれ必要。 ・ 現状で総合運動場として位置づけられており、いずれ更新が必要で、投資が無駄にはならない。 ・ 県の社会体育施設の中でも中核施設であり、その存在意義は大きく、引き続きその機能を担うことが妥当である。 ・ 長期的に滋賀全体のスポーツ文化の発展にバランスをもたらす。

- 鉄道駅から徒歩でアクセス可能である。新幹線の駅からのアクセスや、高速道路からのアクセスも良好である。

・ 交通アクセスは有利（鉄道・新幹線・名神）。 ・ 交通アクセスが（非常に・最も）良い。 ・ 公共交通機関より徒歩で行ける部分を評価。 ・ 近畿圏だけでなく、北陸・名古屋圏からのアクセスが期待できる。

- 市街地にあることから住民の日常的利用が期待でき、また周辺の観光施設・商業施設の活性化等の相乗効果が期待できる。

・ 利便性が良く多様な人々（小学生、中学生、高校生、女性、年配など）が日常的に利用可能な施設。 ・ 市街地にあり周辺住民、学校の支援を受けやすい。また近くに学校、彦根城、商業施設等があることから、ｽﾎﾟｰﾂ以外のｲﾍﾞﾝﾄ会場としての用途も期待できる。200 億円前後の公的資金を投入する以上は、スポーツ関係者以外の様々な人にも恩恵がある形にすべき。彦根城を中心として観光名所や地場産業が定着しており、それらと連動させることで地元への経済的、社会的効果の点で最も多くの恩恵を提供できる。スタジアムと周辺の観光、商業施設の間で人が行き交うことができる。 ・ 市街地や文化資源に隣接し、市街地への直接的な整備効果が期待できる。 ・ スポーツはじめ文化利用、商業活性化で優位。 ・ 地域経済活性化の効果度が高い。 ・ スポーツの推進、地域の観光資源、周辺大学・高校の集積、国体終了後の利活用を考えると彦根が妥当。 ・ 商業施設や観光も見込める。

● 琵琶湖や彦根城などの観光資源に近く、湖国滋賀をアピールしやすい。

・ 彦根城等をシンボルに滋賀を世界にアピールする国体もありうる。 ・ 近くに琵琶湖、国宝彦根城を望む位置での主会場は、滋賀の認知度を上げる施設となる。 ・ 彦根市が歴史的にも滋賀県を代表する土地であることは、地域ブランドの強化としても大きな効果を見込める。

【課題】

● 彦根城をはじめとする周辺景観への配慮が必要となり、施設の規模等に一定の制約がかかる可能性がある。

・ 彦根の周辺市街地へのインパクトを軽減するためのデザインの質、配置計画などによる事業費の影響等が考えられる。 ・ 風致地区の制約がある。 ・ 世界遺産登録について市が総合的判断をすることとなったとしても、期待している市民にどれだけの説明ができるのか、理解が一定得られるのか悩ましい一面があるのではないか。

● 現在の運動場敷地だけでは狭く、存置する建築物があり配置の自由度が少ないため、整備やその後の活用を考慮すると、周辺用地の確保（買収）が必須となる。

・ 多少、規模としての課題は残る。 ・ 敷地面積に余裕がない。 ・ 総合施設としては狭く、民有地買収、敷地拡大が必要。 ・ 配置の自由度が少ない。敷地の拡大が担保される必要がある。

● 県立総合運動公園としての機能を維持するためには、代替機能も含めまとまった土地を隣接して確保することが望ましい。

・ 敷地の確保状況によっては、総合運動場としての規模に見直しが生じ、国体を開催するためだけの施設となる可能性がある。 ・ 代替施設の移転先の確保、民有地買収が問題。 ・ 総合運動公園としては、代替機能も含めまとまった土地を隣接して確保することが望ましい。

● 住宅地に近いため、騒音、照明等での配慮が必要となる。

・ Ｊリーグや各種イベント開催に伴う騒音については受忍されない可能性がある。 ・ 近隣住民の理解が必要。 ・ １種陸上競技場には照明設備は必須で照度も決まっている。サッカーの利用をはじめ、夜間利用に制約がかかる可能性がある。

● 都市公園としての整備や、整備にあたり必要となる用地確保、周辺環境への配慮にあたり、周辺住民や彦根市の協力が必要となる。

・ 不足する敷地確保や、市管理の都市公園区域拡大等について、どこまで市が取り組むのか、具体的な決意の表明が必要。 ・ 事業スキームと市の関与に向けての決意が不明確。 ・ 人家が連担する中での整備工事となることから、周辺住民の協力が不可欠であり、また、その対応に時間を要することを想定する必要がある。 ・ 用地買収が必須であり、また近隣住民への十分な説明が必要になる。用地取得や地域住民との協議に対する地元彦根市の取り組みが重要となる。 ・ 周辺施設や景観に関する点をはじめ、実現するには彦根市の協力が不可欠。 ・ 既存施設の撤去・移設、用地買収等課題は沢山あり、彦根市の協力は欠かせない。

◆希望が丘文化公園

【利点】

- 事業費が最も少ないこと、都市計画法上の制約がなく公園整備に当たり新たな用地確保の必要がないこと等から、整備の確実性が高く、スケジュール上の課題が少ない。

・ 事業費が最も少ない。 ・ 整備の確実性が高い。スケジュール上の課題が少ない。 ・ 都市計画法上の制約がなく、広大な敷地を生かした大規模な施設の建設が可能。 ・ 県内の総合運動公園を希望が丘１箇所に集約できるなら主会場としての整備も可。

- 敷地面積に余裕があること、大規模イベントの開催等の実績もあること等から、多目的な施設利用の可能性がある。

・ 敷地面積も広く自然も多いなど、総合施設として今後の利用を考えるとよい。市街地ではないため多くの人が来ても近隣に迷惑がかからない。 ・ 敷地面積に余裕がある。滋賀の中心であり、アクセスの整備が十分になされるのであれば、滋賀のシンボル、拠点として多目的に機能する可能性がある。

- 合宿地としての利用など、総合施設としての活用の可能性がある。

・ 合宿地としてすでに高い知名度を誇っており、国体後の利用に向け「参加型スタジアム」としてスポーツ合宿地としての整備が可能。

【課題】

- 公共交通機関によるアクセスについて、他と比べ弱い。

・ 公共交通機関からのアクセスが悪い。 ・ 市街地からのアクセスが悪い。 ・ 中高生の日常的利用に際しては、公共交通機関の利用の面で不便。 ・ 自動車利用によるアクセスが基本となっている。公共交通の利便性を高めるなどアクセスは検討課題。

- 高速道路からのアクセスに難がある。公園内通路の整備は、公園の利用形態を考慮すると、通過交通の発生を伴うため安全面での不安が残る。スマートインターの整備等によるアクセス改善が望ましい。

- 公園内道路の整備（通過交通の発生）を行うと安心して施設の利用ができない。
- ICなどアクセス道路整備に課題が残る。
- スマートインターの整備が必要。
- 公園東口からのアクセス改善も必要。
- 不足するアクセス等の社会インフラ整備の実現に課題が残る。

● 市街地からのアクセスが悪く、周辺の観光資源や商業施設等の集積がなく地域活性化につなげることが比較的難しい。

- 市街地からのアクセスの悪さに加え、周辺に商業施設や観光名所が集積していないために地域活性を意図した都市計画へ発展させることが難しいと考えられる。

● 自然公園としての位置づけが定着しており、その良さは今後も活かすべきであり、デザインや配置、規模などへの配慮が必要。また、施設の整備に当たり、これまでのコンセプトの変更に関しては、十分な議論に加え、利用者等の理解も必要。

- むしろ自然公園として残すべき。
- 自然を活かしたデザイン・機能を持った施設とすることが重要。
- 希望が丘文化公園の山並みへのインパクトを軽減するためのデザインの質、配置計画、施設の一部の地下化などによる事業費の影響等が考えられる。
- 山に囲まれ、谷間の自然豊かで空が広がる公園の雰囲気に多くの人が馴染んでいる。陸上競技場の施設規模はかなりインパクトが大きい。空間性を維持するためには少なくとも公園内のどこにいても稜線を切るような規模の人工物の設置は避けることが望ましい。
- 家族連れ等、自然の中でのんびりゆったり過ごすことという一定のコンセプトが認知されているなかで、既存の利用者等の理解が得られるのか、判断が難しい。
- 本県の青少年育成のための代表的な施設としてその役割を担ってきた。豊かな自然環境の中で進められてきたこれまでの施策からの転換には議論が必要。
- 自然公園のイメージが強い。
- 自然公園としての環境に影響がある。

● 国体競技について、２市１町での運営となった場合、相互の調整が必要となる。

- ２市１町による運営となれば、他に比べ懸念材料となる。
- 複数の行政に跨ったエリアであることから、それぞれの市町の思いが交錯するのではないか。

◆びわこ文化公園都市

【利点】

- 滋賀の人口集積地に最も近く、また名神・新名神高速道路の結節点に近いなど、新たな施設の立地を考えるうえで発展性のある場所である。

・ 国体の前年には滋賀と大阪をつなぐ新名神高速道路の新ルートが開通する予定。遠方から車で来場する人にとってはアクセスがよい。 ・ 現制度の見直しを含む新しい発想で整備や運営を進めることができる。 ・ 人口や大学の集積を考えると地域のポテンシャルは高い。 ・ 将来県立体育館の立替えが必要であり、ここに整備するなど、スケジュールに制限を受けない活用が望ましい。

- びわこ文化公園都市を構成する文化・福祉施設等の資源との相乗効果が期待できる。

・ 瀬田南・田上地区の大規模な都市計画の中にこのスタジアム建設が位置づくのであれば、このエリアの新しいシンボルとして大きな可能性を秘めている。 ・ 課題がクリアされた場合大きく化ける場所ではないか。緑あふれる恵まれた自然環境に加え、琵琶湖や新生美術館など、まさに文化公園都市として一大観光スポットになるのではないか。

- 大学（滋賀医科大学・龍谷大学・立命館大学）との連携による「スポーツ」「健康」の拠点施設として将来にわたり活用できる可能性がある。

・ 近隣の大学と連携したスポーツ科学（大学・医師・研究者）の振興の拠点とすれば投資が生きる。 ・ 近隣に大学があるため、１種グラウンドの整備ができると後利用の確実性は向上する。

【課題】

- 敷地の拡張性に乏しく、公園内に多くの機能を盛り込むことは困難である。

・ 敷地面積に余裕がない。工事費用の割には将来性のない設備施設になる可能性が高い。 ・ コストをかけても敷地が十分に取れない。 ・ 新たに造成する意義が見いだせない。

● 市街地からのアクセスに課題が残る。

- 一般道でのアクセスは決して良いとは感じなかった。街の中心でない点は、日常的な利用を阻む原因となる。
- １万人規模の人の動きを想定すると（公共交通機関）アクセスに限界を感じる。
- アクセス道路の整備が必要。

● 大規模な開発・造成となり、適正工期の確保、適正工法の検討を慎重に行う必要がある。また必須となる保安林解除や環境アセスメントの実施等を通じ、環境保全のための必要な対策の選定、実施が必要となる。

- 整備に伴う影響（整備上の課題）が大きく、国体開催は困難と考える。
- 大規模造成工事の工法、工期など、整備上の課題が大きい。
- 保安林解除、環境アセスメントの実施に大きな課題がある。
- 法令上や整備上の課題は大きく、それらの課題をリスクとしてとらえた場合、全体としてリスクが容認できるか疑問が残る。

● 広大な残置森林を確保するため、民有地の買収が必要となる。

- 用地取得や造成工事にかかる経費の問題をはじめ、何かと課題が多い候補地である。
- 造成区域外を事業区域に入れるための民地の取得に大きな課題がある。

● 「びわこ文化公園都市」全体の整備計画と整合した公園整備計画を地元住民の理解のうえ遅滞なく策定する必要がある。

- 「びわこ文化公園都市将来ビジョン」で示された将来像や、公園都市全体の整備計画と整合した公園整備計画の策定に十分な時間が確保できない。
- 大規模な公園計画となり、計画策定や整備にあたり地元住民の理解が不可欠である。
- 未開拓エリアであるが故に、び文公園の地域がブランドとしての魅力に乏しい。
- 既成市街地と文化都市公園の関係、周辺施設との関係をどのように計画していくのかが課題である。

● スケジュールに余裕がなく、不測の事態が発生した場合、整備が間に合わない可能性がある。

- 保安林解除、環境アセスメント実施、民地買収等の大きな課題をクリアしてからの建設整備では、一つでも問題が生じると、場合によって開催に間に合わない可能性がある。
- びわこ文化公園都市は造成して使える土地にするまでのコストと時間がクリティカル（危機的）である。スケジュールにほとんど余裕がない。
- 建設・整備に時間的な余裕がない点は非常に大きな問題。民有地、環境アセスメント、埋蔵文化財などの問題が山積しており、過密スケジュールの中でこれらの課題に取り組むことは新たな問題の発生につながりかねない。
- 整備スケジュールが非常にタイトであり、何かの事案が発生した場合責任が取りきれない。
- 事業費、整備スケジュールの面から実現の可能性は低い。
- 大規模な造成工事、施設整備を考えると、時間的な余裕がない。

● ランニングコストの純増も含め、事業費については最も高くなる。

- 整備に時間もお金もかかる。
- 事業費は高価なものになる。
- 整備費が膨大。単独施設となり維持管理コストが割高となる。
- 大津湖南地域に複数の陸上競技場を整備する必要はないのではないか。

◆その他事項（附帯意見）

【防災機能】

- 国体主会場として交通アクセス等が整備されることにより、いずれの候補地においても防災拠点としての機能増強は期待できる。
- 主会場スタンド下を備蓄倉庫として活用することは、日常の管理、搬入・搬出に必要な機材や人材の確保、食品保管の適・不適について、民間倉庫を活用する場合とも比較し、その必要性・実効性を含め検証が必要である。

・ 高速道路に近ければ、県外からの避難支援物資の受入れや支援部隊の集結等の用途から有用。 ・ 国体主会場として、交通（道路）アクセスや通信を含むライフライン等が整備されることにより、防災拠点としての機能増強が期待できる。そのうえで拠点としての拡張性があればなお良い。 ・ 主会場スタンド下を備蓄倉庫として活用することは、日常の管理、搬入・搬出に必要な機材や人材の確保、食品保管の適・不適について、民間倉庫を活用する場合とも比較し、その必要性・実効性を含め検証が必要である。

【多様な主体による多目的利用】

- スタジアムを拠点とした街づくりをするといった理念を掲げることが必要である。

・ 50 年、100 年スパンでスポーツ・文化の滋賀の拠点として稼働するものでなくてはならない。スタジアムを拠点にした街づくりをすべき。そういう理念を掲げる必要がある。お金はかかるが、人づくり、仲間づくり、地域づくりに貢献でき、県民の財産として還元できる。 ・ 施設整備にあたっては、大きな社会基盤として周辺住民の誇りになるようなものとすることが望ましい。 ・ 将来のことを考えると、レストランなどを含めいろんな形で使われるための施設が付随してできるとよい。利用者も多くなり、経済効果も高くなる。 ・ スポーツに対する理解が進んでいないところがある。文化・芸術とリンクするということをアピールする必要がある。

- いずれの候補地においても、現状では「観戦型スタジアム」としての利用は困難であり、将来のＪリーグ規格対応の可能性に配慮しつつ、国体に向けて最低限の施設整備に留め、仮設等による対応も検討すべき。

・　国体用として最低限の施設整備（仮設含む）に留め、将来のＪリーグ規格対応など柔軟に対応できるものをつくるべき。
・　いずれの候補地においても、集客の面から現状では「観戦型スタジアム」としての利用は困難である。
・　現在Ｊリーグ参入に向け動き出しているサッカークラブは湖南を拠点としており、どのような形で連携していくか課題。

【その他】

● 国体終了後の全県的なスポーツ振興の観点から、体育施設の配置バランスは重要であり、主会場選定後、他の施設のあり方を考えるときには十分な配慮が必要。

・　将来、県立体育館の建て替えが必要であり、びわこ文化公園都市に整備するなど、スケジュールに制限を受けない活用が望ましい。
・　県のスポーツ振興施策や地域活性化施策などとあわせて総合的な判断が必要ではないかと考える。
・　全県的なスポーツ振興の観点から、陸上競技場をはじめとする施設の配置バランスを含めた社会体育施設のあり方ついても、今後、検討していく必要がある。

● 地盤の安定性については、いずれの候補地でも課題があるが、技術的には課題解決は可能である。

・　彦根総合運動場、希望が丘については、元々地盤が強固ではないことから、沈下、不陸の不安がある。
・　彦根総合運動場、びわこ文化公園都市は、地盤の安定性に課題。
・　土地の確保以外は、技術的に課題解決は可能である。

（２）主会場選定評価報告書（素案）について

事務局よりこれまで委員会に提示してきた資料をまとめた報告書（素案）を提示。各委員の意見を求めるとともに、次回、評価や結論部分を加えた状態で審議を行うことを了承。

６　その他

本日の会議では委員会としての方針決定には至らず、４月末から５月中旬の間で第５回委員会を開催することを了承。

第５回委員会の会議日程については、後日、改めて日程調整することを了承。

また、彦根総合運動場、希望が丘文化公園における課題のうち、候補地の比較評価にあたり地元関係市の意向等を確認する必要があるとされた次の事項については、事務局からそれぞれの関係市に確認を行うことを了承。

◆彦根総合運動場

敷地拡張を伴う施設の再整備を行うことに対する周辺住民の合意形成に向けた取組状況や見通しについて

◆希望が丘文化公園

名神高速道路・菩提寺ＰＡを活用したスマートインターチェンジ整備に向けた検討状況について